

# 人間科学方法論における統合的視点

— 理論と体験の媒体としてのイメージモデル —

水 島 恵 一

## Toward an Integration of Structural and Phenomenological Approach in Human Science

— Image Model of Personality Structure as an Intermediate of Theoretical and Experiential Understanding —

Keiichi Mizushima

Theoretical image model of personality structure is regarded as an intermediate upon which both theoretical conceptualization and experiential phenomenal self (uniquely felt experience) are built. This is clarified, in this study, (1) by examining major personality theories corresponding to clinical practice. For example, a patient refers to the analytic theory in some extent and at the same time expresses (or recognizes) himself uniquely with real feeling, although there is some discrepancy between theoretical scheme and uniquely felt cognitive scheme. This is also approached (2) by our original projective study, in which a subject structuralizes his inner world both theoretically and experientially. Thus we confirm more and more that image model or mental imagery as a whole is regarded as foundation of both theoretical structuralization and phenomenological understanding, although further studies are necessary to clarify the differentiation of theoretical and personal cognitive structuralization. Image model is expected to be important also for the integrations of subjective and objective understanding of social, cultural and other phenomena in human sciences.

### 1. 方法論の概観と本論の問題提起

人間科学が心理学、社会学等々の経験諸科学において養われてきた専門性を生かしつつ、同時にナマの人間と生活の全体性（現象それ自体）にたちもどった総合をめざすから

には、独自の統合的視点と方法がなければならない。とくに、操作的・行動科学的視野と方法を典型とした分析的実証的アプローチに対して、それをよせあつめるだけでなく、それが人間、生活の生きた全体への理解に統合される方法論が重要になる。この「部分的専

門性を生かしつつ全体に迫る」という課題にむけて、すでに多くの人間科学論は論理性、実証性、客観性などのいわゆる「科学性」を再検討してきた。そこでは直観の検証、参加観察を含む実践的検証、共有可能性という意味での普遍性等々が探索され、さらに定義、統計法を含む検証手つづき等々に関する新しい視点も提供されつつある。一回限りの事象に関する人物描写のないし歴史的アプローチの意味や、解釈学的視点、創造行為としての視点（客観主義に対する間主観的立場）、等々も重要である。これらすべてにわたった方法論的吟味は、筆者の前論（相談学研究1976）を含めて、集大成しつつあるところであるが、本論では、現在人間学的に最も重視される「理論的法則的理解と体験的理解の統合」に的をしぼり、特にその一つの媒介となるイメージモデルの役割を中心に吟味を行いたい。

理論的・法則的理解と体験的理解の統合の課題は、第一に今述べた「生きた総合性」のために不可欠であるが、第二に個別専門領域か統合領域かを問わず、自分自身、具体的他者、具体的社会事象、生活事象のナマの姿をとらえ、それに主体的にかかわるために不可欠である。それは学術的水準を犠牲にせず、しかも初歩の研究者や一般生活者にとって、わかりやすくかつ参与できるということにも通じる。第三にこのことは必然的に実践の学に直結し、心理臨床、社会福祉、人間教育等々において対象者自身が人間的社会的洞察を深めつつ自己変革、社会変革を志向してゆく道筋に通じる。たとえば、ソーシャルワークにおいて社会学や福祉学の知見がクライアントの主体的体験的認知に採り入れられてこそ、現実に結実するようなことである。もちろん

これらのことは、たんなる「体験主義」ではなく、科学的分析、とくに広義の構造的理論と補い合うものだということが、前論で述べた。極端な要素主義的アプローチの場合を除けば、それは構造理論による客観的アプローチと主体的現象学的アプローチとの統合の問題だといってもよい。

現象学の側から見るときには客観的、構造的な研究は、現象を結実させ、かつ科学の軌道にのせる枠ぐみとしてプラスに評価される。一方少なくともナマの人間、生活事象に関するかぎり、いかなる構造的把握もある角度からの現象の切断だという一面性をまぬかれない。ある断面からの構造的アプローチのみによって事象に迫れるのは、ある要因ないし特定側面のみが強調されている特殊な場合か、あるいはその事態に対して研究者ないし当事者が限定された役割をもつ場合のみである。公害に極端に悩む地域においては、当面、個人の心理的構造やパーソナリティ差が捨象され、生態学的構造、社会学的構造のみに焦点があてられてよい。場合によっては公害という要因をめぐっての特殊な専門的切断をした理論のみによって事がすむかもしれない。しかし軽度の公害地区では、生活事象そのものの理解も、それへの対処も多角的にならざるをえないであろう。同様にして例えばエディプスコンプレックス様の極端な悩みを持っている神経症者の理解・治療のためには、心理学の、しかもフロイトの構造論だけで充分かもしれない。しかし一般にはフロイトの構造理論から漏れる面の理解も不可欠であり、さらに社会学的、人類学的諸断面による理解も不可欠になる。

では真の総合的理解とは、これらすべての

構造をさらに総合的に構造化することであろうか。しかしきわめて多面的な構造を総合するために、細部を犠牲にした高度の抽象理論に頼れば、具体的体験ともまた個々の科学的研究とも遊離することになる。操作的に複雑な処理、(例えばコンピューターによる統合)を試みれば、体験的理解とはますます遊離するであろう。

筆者は今回本論の土台を兼ねて、主な人格理論とそれにもとづく研究事例を集積したが、その分析吟味の結果は、むしろそれぞれの観点ないし断面からみた諸理論がそれぞれの重みをもち、研究者や専門実践者は、複数の観点・理論をもって、ある変換を行ないながら、必要に応じてさまざまな角度から現象にアプローチしているということであった。そしてこのような仕方を支えている重要な鍵が、各理論のもつイメージモデルだと推察された。科学史上の一般論として、イメージモデルが理論の直観的な理解を容易にするからというだけではない。とくに人間科学においては、理論と体験をつなぐ点にイメージモデルが想定される。つまりイメージによって構造的客観的理解と現象学的理解が媒介されるからである。生きた人間学は、高度の抽象的総合も、また単なる操作的総合もなしえず、イメージの許す範囲での理論的構造を単位としてもたざるをえない。

以下に人格理解における理論と体験の統合を例示するが、しかしこのことによって、相互に矛盾し合った多数の理論の通常の止揚・統合が困難になり、筆者が「相補的統合」とよぶ方法論が必要になることも付加的に考察することになる。

## 2. 理論と体験を媒介する

### イメージモデルの役割

イメージモデルは理論的枠ぐみの構造化の基礎になりながら、同時に体験的認知を結実させる枠ぐみにもなっている。筆者が人格諸理論を、行動理論、認知理論、精神分析理論、その他の精神力学理論、有機体理論、ゲシュタルト理論、折中理論、現象学的理論に分類し、さらにその下位カテゴリー別に分析した結果は、イメージモデルのこの媒介的役割は、極端な操作的行動理論を除いた、ほとんどの人格理論に多少とも認められ、とくに精神力学的構造理論において顕著なようであった。

とくに理論が治療教育と結びつく事例において、イメージを媒介とした「理論の体験化」が示唆された。例えばフロイトやユングの理論図式はある程度イメージ化できるものであり、フロイトやユングの理論を受け入れた人(とくにその分析を受けているクライアント)は、その構造枠にある程度準拠しながら、自己の体験的世界をイメージ化している。ここでフロイトの分析を受けたクライアントが、知的強味でフロイト理論に精通してくるだけでなく、概念⇒イメージ⇒体験的実感というある対応をもった過程が働き、概念言語が体験言語になることが認められる。つまりフロイトの概念を用い、ほぼその理論に従いながら体験的実感を表現することが可能である。

「いま私の中には小さいときから固着している口唇期的なりビドーがうずまいて、自我がそれをとても統制できないでいる」というような表現である。これを理論的記述とみれば、そのまま人称をかえ、若干の形容を除いて、学術論文に使える。しかしこれをイメージと

してとらえれば、例えば「いま私の中には、小さい時からわだかまっていた甘えたい気持ちがあらずまき、赤ん坊のように母親に抱れたい」ということにほぼ対応する。逆に後者のような体験言語をフロイトの理論枠で整理して概念化することは「解釈」として常に行われているところである。

もちろん体験化に際して、概念や枠組の若干の歪曲や象徴のおきかえが働くことは確かである。例えばフロイトのリビドー論が定義通りにあてはまらない場合でも、それを象徴的イメージとして用い、その概念に従って自己洞察（認知）を統合していけるクライアントは決して稀ではない。さらに個有の歪曲もあり、したがってフロイト派の治療者といえどもクライアントの用いる概念が、厳密に理論的に正しいかを問うわけではない。クライアントの自己認知の枠組みは、フロイト理論におおよそ従いつつも、彼に固有な認知枠に準拠している。治療者も解釈や自己理解が体験的実感になっているかどうかを問い、できるだけ体験的実感になるようなことばを用いる。そういう意味では逆に自らのフロイト理論を相手の体験的なことばに翻訳しているのだといってもよい。つまりイメージモデルはおおよその枠組であって、個人に固有の具体化が許されるからこそ、体験化も可能になると考えられる。（この点を徹底してクライアントの固有の準拠枠にのみ従おうとしたのがロジャースのクライアント中心療法の原理だといってよいであろう。）なお、体験的イメージとしては普通夢、芸術等にあらわれる極めて具体的なものが用いられるのであるが、これらのイメージも一定の形式はもっており、かつ理論的図式の補助によって結実しうる点

に注意を要する。

一方、理論の側からみると、概念的理論に使われるイメージモデルは、そもそもかなり便宜上のものである。理論そのものは純概念的に論理性と整合性をもたなければならない。理論の重要な部分はイメージ化できないことも多い。

したがってすべての理論が体験化され、逆にすべての体験が体系的に概念化されるわけではない。このことを前提にした上で、しかし多くの事象について、イメージを媒介にして双方の過程が進行しうることを重視したい。イメージモデルは理論的には便宜上のものであり、体験枠としては固有の具体化を許すからこそ、双方の媒介になりうる。したがって論理的厳密さのみを追求すれば体験の実感から遠ざかるわけであり、逆に体験的実感に忠実であろうとすれば、イメージモデルにある程度の論理的漠然性、個別的ニュアンス等々を許容しなければならなくなる。本来概念理論領域に属する人格理論の体験的イメージモデルを問うときには、この漠然さや個別的ニュアンスの許容範囲を明確化することが重要なわけである。

筆者らは、なお関連実証研究として、概念語であると同時に体験的実感を起させる文字カードによる「カード式図式的投影法」（文教大紀要 1978. 同、体験と意識に関する総合研究 1979）を用いて人格構造の体験的投影を行っている。これはまだ中間段階であるが、一定の理論枠の図式上に被験者の心的内容をあらわすキイ・ワードを配置させ、その理論にしたがった実感的自己表現を行なう場合、上述の理論枠と体験枠の交流がかなりみられる。ただし、フロイト理論に従って例えば「努

力」という文字カードを「自我」という領域に属しているものとして、論理的に配置してみても、実感的にはより深層領域に置いた方がよいという場合もあり、また自我領域の中での位置も問題になる。これは体験的に意味はあっても概念的には適切な反応とはいえない。さらに領域に分けられた場を用いずに「イド」「自我」「超自我」等をも文字カードにして自由に配列した方が実感的になる場合もあり、この場合各カードの相対的位置や距離が問題になるのではあるが、それは概念的には厳密さを欠き、あくまでおおよそのイメージにしたがったものにすぎない。構造枠も個々の(カードにあらわれた)概念も、被験者なりに投影的にとらえたものである。にもかかわらず、①その「おおよそ」という点において、それは理論の枠ぐみとある対応を示すこと、②漠然性とくに個人的投影性が許されるからこそ体験の実感に添うことができること、が認められるのであって、これは上述した人格・治療理論の資料分析の結果と一致している。

おそらくこのような実験的方法によって、イメージを媒介とした理論と体験の交互作用がより明らかになり、治療過程における概念的洞察と体験の実感との相互作用も明確化されるであろう。方法論的には、イメージのあいまいさや変容性が概念的にどの程度の逸脱にとどまるかということの明確化などが重要だと思われる。

(注) なおイメージモデルは概念論理のような一義的な明晰さは欠くわけであるから、従来の科学的論証のみでなく、共感過程を含んだ認知の共通性をもっていかに科学的普遍性にまで高めうるかという科学論的課題を私

たちに課することにもなる。この点も一部前論(相談学研究 1976)で触れたが、イメージ自体の科学的研究がさらにヒントを与えていくことになると思われる。

イメージが主体的行動を表わし、自然科学的思考でさえ対象を擬人化して、イメージ化することによって成立するということは、最近の認知・情報理論的アプローチの中でも明らかにされつつある。つまり生活・イメージの世界がまずあって、そこから科学的抽象化もまた体験的具象化も成立している。ここでは理論的イメージモデルのみに論を限定したが、イメージが一般に理論と体験の媒介になることは、今後実証的にも科学論的にも明らかにされていくであろう。

### 3. イメージモデルの相補性

以上、イメージが理論と体験の橋渡しをしつつも新たな方法論的課題を私たちに与えることをざっとみてきた。しかし構造理論にとって最大の課題は、イメージモデルに固執する以上、異った理論モデルが相補的にしか統合しえなくなるということである。

筆者の今回の人格理論の資料分析によれば、概念レベルにおいても、洗練された諸理論は折中も統合もなされえず、各々が人格そのものをある断面でとらえたものとして尊重され、相互の相補性を認めなければならないようであった。ただ操作的にはこれを止揚・統合していく道が理念上は可能である。事実、多くの理論論争は、経験的事実と論理的整合性に照らして相互修正をしながら、止揚・統合をめざしているのだといえる。

しかしイメージモデルに固執するかぎり、このような高度の概念的止揚・統合は困難で

ある。イメージが生活体験に根ざしているというその長所は、逆に生活体験から極端に離れた多面的構造化が困難だという短所にも通じる。イメージは概念ほど抽象的分化をとげていないので、操作的科学の具として曖昧さを含むだけでなく、何よりも生きる姿勢による知覚の限定性をもつ。見る角度（より正しくはかかわり方）によって構造が異なってしまうということは、概念よりイメージにおいて宿命である。したがって概念的には、弁証法的統合をなす二つ以上の矛盾する理論も、そのイメージモデルに根拠をおく限り、矛盾を含んだままのモデル間の統合という形をとらざるをえない。これが今までに漠然と述べてきた「相補性」の真の意味である。現代物理学において、量子力学の統合理論が概念的に成立しても、それを粒子モデル・波動モデルのイメージからみるときは、相補的にしか理解しえないのと同様である。

しかし人間・生活事象の理解においては、この相補的統合が、知覚の図——地反転、その他の有機体的・社会力学的原理によって可能になるのであって、このことは前論（相談学研究1976）で明らかにした。

例えば私たちはフロイトのイメージモデルによって表現しきれない面を、ユングのイメージモデルによって表現することがあるが、その統合は一見たんなる使いわけにすぎないような便宜的なものであり、少なくとも論理的に統合を考えた上ではない。しかし詳しく分析してみると、そこにはある変換の規則性がみられ、それが少なくとも若干は論理的矛盾をこえる働きをなしている。このことは例えば柔軟な治療者のもとで、フロイト的イメージによってエロスのタナトスの衝動を語り、し

かもある時点でユング的集合自己の感覚を語るようなクライアントの力動にみることでできる。そこでは知覚の図地反転を含み、潜在的構造ないし地の力学を含んだ上での直観的統合がみられる。平易に言えば、概念ないし図式的イメージの上からは矛盾したA・Bについて、「AでもありBでもある」「ある見方をすればAであり、別の面からみるとBである」というように統合理解される。

相補的統合の過程は、もちろんこれに尽きるものではないが、紙数の関係で別の機会にゆずる。結論的には、通常考えられている諸理論の止揚・統合が、「図」としての統合であるのに対して、相補的統合は「地」を含んだ統合であり、それゆえ直観、共感を前提にするものである。

実は本論の主課題である理論的構造と体験的実感の関係も、また相補性をもつものである。平易に言えば「人は客観的法則をもった客体であると同時に自由な主体である」「自分の体験は他者の体験とともに対象的に研究されるものでありながら、しかし全く独自のものである」ということにつながる。

人間学的実践の中においてたえず観察される共感・共同行為には、理論の相補性、主客の相補性がたえず観察される（人間学の実践、有斐閣、1979）。全人格的、主体的相互作用が生かされ、かつ現実的科学的客観性を見失わない実践が可能になるのも、また個人的個別的内面も社会的現実も見据えた実践が可能になるのも、相補的統合においてである。人間的実践者（イコール研究者）は共感的主体的認知を絶えず客観的理論的理解の中に位置づけ、対象的理解の結果をまた絶えず対象者の主体的認知（直接経験）の中にフィードバック

クさせて、それに準拠している。つまり構造化の手がかりとして対象的客観的法則性をとり入れながら、直接の準拠を一人ひとりの直接体験におくようになっていく。彼はある理論体系や知識の体系（ないしは彼なりの知識の集大成）をもっており、これが彼の準拠枠である。それを洗練するために彼はきわめて部分的な操作研究も行なう。しかし実践者としての彼は、それを単に理論枠としてもっているだけでなく、その枠に従って体験を実感的に整理している。逆にいえば、人間、生活の実感にもとづいて自由に構造（理論枠）を変換して多角的に現象をとらえているのである。理論と体験の統合が、実践との統合にも至るとみてよいであろう。

#### 4. ま と め

実践を含めた人間科学的アプローチにおける理論的、法則的理解と体験的理解の一つの重要な橋わたしをするイメージモデルの科学的意味を整理すると次のようになる。すなわち、①イメージモデルは理論を体験的に「わかる」ためのほとんど必須要件であり、実際には概念的理解の助けにもなっている。②より包括的にいえば、理論的概念的構造と個人の認知・体験構造の分化する以前の原点にイメージがあり、この原点を媒介にして相互の変換が可能になる。③しかし科学的方法論としてはイメージの特性上、概念的操作的不明確さを補うための新しい方法論が要求される。④異った角度からの構造理論の統合は、イメージ的には矛盾を含んだものであり、体系的には操作的にのみ可能である。（自然科学においてはこの操作的方法のみで充分である）。⑤これをイメージモデルからみると、相互に

矛盾を含んだモデル間の相補的統合ということになる。それは構造変換を含むものであるが、体験的にはそのつどあるモデルが「図」になり、たえず図——地反転、構造変換を繰り返しながら、そのつどの現象が「地」の余韻を含んで認知されることになる。⑥理論と体験の諸段階に対応して概念的に洗練されたイメージモデルから全く個人的な認知枠（ケリーのいう世界解釈のコンストラクトなど）に至るまで無数の段階があり、共有されたモデルによるほど「共有可能性」という意味での科学的普遍性と両立する。⑦理論的認知枠と体験的認知枠も、客体としての人間像と主体としての人間像にかなり対応して、相補的に統理解されるものであり、客観科学（とくに操作主義）と現象学との統合も究極的には相補的になる。

イメージモデル以外の重要な媒体をも含んで一般論化すれば、事象に様々な角度からかわる（単にながめるのではない）その様々なシエマの潜在的総体こそが科学的理論的理解と体験的理解の統合の原点だといえる。それはまた様々な単科学の統合の原点でもある。それは分化以前の経験の原点（人間学、有斐閣双書、1977）に準拠しながら諸理論、諸実証研究を位置づける。人間がかけがえのない一人称主体でありながら同時に有機体でもあり、心的統一体でもあり社会集団の成因でもあり、社会的場の一つの関係的事態でもあり、不断に変化、自己形成していく存在であり、さらに数百ページを使っても描ききれない多様で具体的な存在だということに対応するものである。

本論においては、パーソナリティ理論を例

にとって分析を行なってきたので、心理学における他の領域や、社会学、教育学、人類学等の領域に関しては、おそらく若干のニュアンスの違いが生じてくるであろう。ただ基本的には、生態系、社会集団、文化、生活、人間関係、意識等々のすべてについて、ここで展開した方法論的基礎の妥当することが期待され、今後の各領域からの検討を望みたい。ただ本論では、イメージモデル以外のイメージ一般論は省略し、イメージ以外の（ないし

以前の）重要な媒体についても論を省略している。変化の過程等の問題も省略せざるをえなかった。これらについては、機会を改めて検討したい。

最後に、本論の人格理論研究のための資料収集にあたっては、一部を文部省科学研究費の補助によっているところを付記しておきたい。

(1979年9月28日受付)